
サスティンワールド

禽兜蟲彌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サステインワールド

【Nコード】

N3932Z

【作者名】

禽兜蟲彌

【あらすじ】

国産の完全スキル制VRMMO「サステインワールド」のオープニングイベントで、突然デスゲームが開始されてしまう。全員スキル0から始まったデスゲームに、鎗助達はとう立ち向かうのか。

待ち合わせ

「ケンジ！お待たせ！」

「おう！鏑助！遅かったじゃねえか！つっても他のみんなもまだみたいだけだな」

「そりゃキャラメイクがこのゲームの売りの一つだからな。ミナモなんか時間ギリギリまで来ないんじゃないか？」

「あいつは自キャラ萌えはなはだしいからなあ……」

「このゲームの価値の90パーセントはキャラメイクにあり！とか、のたまってるしな」

「それに比べて鏑助ときたら…… 時間掛けた割に、そのしょぼくれたキャラはどうなのよ？」

「うるさい！これでも俺なりに色々とかだわってんだよ！お前の方こそ、そのテンプレくさいイケメンキャラはどうなんだ？」

「いいんだよ！あんまゴチャゴチャやって、お前みたいにわけのわからんことになるのがオチだしな」

「人のこだわりの結晶つかまえて、わけわからん言うな！」

「ハハハッ！さて、時間までまだ45分程か…… チュートリアルは出来るみたいだけど、みんなを待ってなきゃならんし、正直暇だなあ」

「だな。オープニングイベントなんて、いったい何する気なのかね？」

「わからんよなあ ログイン開始から2時間も街から出れないなんて前代未聞だろ」

「だよなー これでイベントが期待はずれだった時は、ただじゃおかん！」

「おう！そんなときは王城に乗り込んで王様をギッタギタのドロッド口のグッチョングチョンにしてやろうぜ！」

「グロいわっ！っーか王様関係無いだろ！だいたい貴重なイベント

NPC消滅させたら、俺らが他のプレイヤーにギッタギタのドロツドロのグッチョングチョンのポニョッポニョにされてしまうわ!」
「ポニョッポニョってお前……」

「うつつ、聞かなかったことに…… どうか聞かなかったことにしてください……」

「そもそも遅いわ!グロググロのケンジ!そしてポニョッポニョのさびやん!」

「えっ、風音!?おまつ、なんつータイミングで現れやがる!」

「そっちこそ待ち合わせ場所で、声掛けるのが恥ずかしくなるような会話してるんじゃない!このポニョッポニョどもが!」

「ちよっ、俺までポニョッポニョに入れるんじゃないねえ!」

「いやいや、俺だつてポニョッポニョなんかじゃないんだ!話を!俺の話を聞いてくれ!風音!」

「えーい!やかましいわ!あんたらもうポニョッポニョに決定や!このゲームしてる間はポニョッポニョワン、ツーと呼ぶから覚悟しとき!」

「「えええええええー!?!」」

「なんだか騒がしいと思えば、やはりおぬし達か…… 声を掛ける方の身にもなつてくれ……」

「た、たまやん!違うんよっ!うちはただ、この馬鹿二人に世の中の常識つてもんを教えとっただけで!そんな三馬鹿みたいなくくり方はやめて!」

「「やかましい!馬鹿おんな!」」

「っ!馬鹿二人組に馬鹿つて言われた!?!」

「やれやれ…… まったくおぬし達ときたら……」

「部外者ヅラしてんじゃないねえ!そもそも声を掛ける方の身になるの

はお前だ！恥ずかしネームナンバーワンの、たまおとこ！」

「そうやで！たまやん！」

「そつだ！自覚しやがれ！このっ『蟹玉雑炊スペシャル麺全部盛り好き男』！」

「……………」

「……そこっ！素通りしようとするな！ミナモ！」「……」

VRMMO『サステインワールド』内的一幕である。完全スキル制国産VRMMO『サステインオンライン』の続編として、ファンの期待は高い。レベル制のゲームに人気が集まる昨今、完全スキル制を望む声も多く、そういったプレイヤー達が今日のサービス開始を前に集まっている。現在進行形で前作のプレイヤーである鏑助達も、本日19時のオープニングイベントに参加するために、待ち合わせしていたところだった。

「ひ、人違いじゃ無いでしょうか？みなさん見覚えありませんし……」

「おいおいミナモ？あつ！そついや名前の重複がないように早い者勝ちなんだよな。ありきたりな名前だし、かぶっちゃったのか？むしろケンジ取れたのって奇跡に近いんじゃないか？」

「おいおい鏑助、鳥頭もたいがいにしとけよ？俺がこの名前取れないわけねえだろーが」

「え？」

「そつやで、騙されんなやさびやん！うちら名前引き継ぎサービス使ったやろが！なに忘れとんねん！」

「そついやそつだったな……ってことは！ミナモオー！」

「嫌あー！ 変態が集団で襲ってきますー！ お巡りさん！ガードさん！GMさーん！誰でもいいから私を守って！」

「グフフフツ！世界広しといえどもおぬしを守る者などどこにもおらぬわ！いい加減に観念せぬか！ファーツハツハツハツハ！」

「たまやんは黙つとき！」

「ううう…… 気合い入れてめっちゃ可愛らしいキャラ作ったというのに…… 仲間が変態集団だというのは選べないのですか？神様あー」

「……誰が変態集団だ！いい加減にしろ！」

サスティンオンラインのプレイヤーが、サスティンワールドに移行するに当たって、唯一優遇されるのが、この名前引き継ぎサービスなのだ。

「まあ変態は仕方ないとして、このキャラの可愛さったらどう？まるで映画のヒロインが抜け出てきたんじゃないかってくらいの出来じゃない？ねっ錆助、どう？」

「変態はお前だ！この自キャラ萌え変態娘が！ しかしまたエルフとはね、ミナモは今回も魔法使いでいくのか？」

「まーねっ！こんな天使みたいなキャラに回復してもらえるんだからありがたいと思いなさいよねっ！って誰が変態かつ！このど変態っ！私の可愛らしさをスルーする変態に呪いあれっ！だいたいゲームの中でくらい超絶美少女の夢を見たっていいじゃないっ！そんなしよくれたキャラを作っちゃっ錆助にはわかんないのよっ！ケンジだってイケメンキャラだし風音ちゃんだってボインボインだし玉っちは…… まっ置いといて。 とっ にっ かっ くっ！自キャラに思い入れがないと楽しくないでしょーがっ！みんなもそーでしょ？」

「人のこだわりの結晶つかまえて、しょぼくれた言うな！」

「俺のはほとんどテンプレまんまだけどな。見てくれがいい方が思い入れがっつてのは、まあ同感だな」

「ちょ、ミナモ！？そんな流れて言われたら、まるでリアルのうちが断崖絶壁みたいやん！」

「魔法少女を目指すのなら何故ハーマイオニーを目指さないのか！ちなみに我が輩は一作目のハーマイオニー以外は認めん！」

「」「」「黙つてろ！このっ真性ど変態っ！」「」「」

古い映画ではあるが、ファンタジーなゲーム世界にどっぷりと浸かりまくった彼らにとっては、古典の一種として認識されているのだ。

「私はエルフ魔法使いとして、みんなはどうするの？ケンジってハイヒューマン？」

「おう、俺はハイヒューマンの前衛。詳しいことは決めてないけど、だいたい前作と一緒だな」

「そうね、ケンジらしいわ。鏑助は？」

「俺はヒューマンでエンチャンターでもやろうかと思ってる。前は戦士だったからとりあえず魔法使いがいいな」

「あらま、じゃあ回復はご自分でどうぞっ！獣人の戦士でもヒューマンの魔法使いでも、しょぼくれ具合は変わらないのね…… 風音ちゃんは？」

「うちは今回獣人の戦士やな。前は魔法使いやったからな！」

「そっか、職業は180度変わっても、ボインボインは変わらないのねっ！玉っちは…… なに？」

「ふむ、見てわからんか？我が輩はハイエルフじゃから魔法使い志望じゃの」

「わかるかー！たまやんのアホー！ついでにミナモのアホー！誰が

万年インチキボインボインやねん！まあそれは置いてー。どこにそんなまるまると肥え太って、くたびれた中年じみとるハイエルフがおんねん！」

「そうよ！玉うち！それはハイエルフのみならず、全エルフ種に対する冒瀆よっ！」

「フツフツフツ！よいでわないか！こんなハイエルフヴァンパイアが一人くらいおってもものう！」

「よりにもよってヴァンパイア志望かい！謝れ！全国のヴァン・ヘルシングさんに謝れ！」

「何故に我が輩が宿敵たるヴァンなんちゃらさんに謝らないといかんのか！納得いかーん！」

「『『『いいからお前は謝まっつけ！』』』」

サステインワールドでの種族は、サステインオンラインから引き継がれており、獣人、ハイヒューマン、ヒューマン、エルフ、ハイエルフの順で、近接戦闘が得意な種族から魔法が得意な種族になっている。その他に、猫人族、ドワーフが、生産職向きの種族として用意されており、猫人族は料理などの細やかな作業、ドワーフは鍛冶などの力仕事が得意だとされている。

とはいえ、完全スキル制の前作では種族間の差異はあまり無く、よほどこだわりのある者や、対人戦に明け暮れる戦争好き以外は、見た目で選ぶプレイヤーがほとんどだった。猫人族の前衛戦士や、獣人の魔法使い、ハイエルフの鍛冶屋なども珍しくはなかったので、今作もおそらくそうなるであろうと思われる。

「さて、ミナモも来たことだし、そろそろじゃねえーのか？ 錆助」
「お？ そうだな、そろそろ行くか！ っとその前に、はぐれないようにパーティ組んでおこーぜ」

—— オープニングイベント会場、城門前広場 ——

城門の真上にあるバルコニーで、猫人族のGMがマイクを握っている。

「それでわ皆様！いよいよサステインワールドの幕開けです！皆さんも一緒にー！」

『じゅー！きゅー！はち！なな！ろく！ごー！よん！さん！にー！いちっ！』

『ぜろー！ー！』

ジ…ジジッ ジッ ザアアアアアアアアアッ

世界はノイズに包まれて、鏗助は意識を失った……

初動

「『デスゲームを開始します！キャハハハハッ！』」

ゲーム内アナウンスや、全NPCの口から同じ言葉が繰り返されている。錆助達は、ただ唖然と立ち竦むことしか出来ずにいた――。

錆助が意識を取り戻した時、そこは意識を失った城門前広場ではなく、うらぶれた田舎町の芝生に覆われた広場だった。辺りを見回すと人が大勢倒れていて、その中に見知った人影を見つける。不穏な言葉が耳に届いてくるが、今はただ、仲間の安否を確かめることで精一杯だった。

ふらつく足を引きずりながら、見覚えのある背中を揺すって声を掛ける。

「ケンジ！おい！起きろ！風音！玉男！ミナモ！おい！」

「ううう……ここは？何がどうなってやがる」

「ケンジ！とにかくみんなを起こせ！」

「なんやの？これ……」

「風音！無事か！」

「んんっ　ここは？……えっ？デス…ゲー…ムっ…て……」

「ミナモ！」

「ぐぬう…　我が輩としたことが、気を失ってしまうとはなんたる不覚」

「玉男！とにかくみんな無事で良かった……」

「この状況が無事って言っているのかどうかは、分からねえとこだ

がな……」

「ああ……」

意識が戻った五人の目には、倒れていた人々が、一人、また一人と起きあがる姿が映り。その耳には信じられない言葉が、否応なしに入り込んでくる。ゲーム内アナウンスは、不快に頭の中で鳴り響き、耳を塞ぐことも許されず。NPCは狂ったような顔で笑いながら、ひたすら同じ言葉を繰り返し、人々の不安をかき立てていた。鏑助達はどうしたらいいのか、何を考えればいいのかさえも分からずに、ただ押し寄せる不安に捉えられ、フリーズしてしまう。

立ち竦むだけの時間がどれほど過ぎた頃だろうか、広場の端から突然悲鳴があがる。

「嫌アー！何これ？どうなってるの？助けて！誰か助けてよ！嫌アアアアア！」

誰のものかわからない悲鳴をきっかけに、鏑助とケンジがいち早く再起動を果たした。二人とも真っ先にログアウトを試そうとするが、仮想コンソールからログアウトのメニューは消えていた。鏑助がつぶやく。

「ログアウト出来ない……」

ケンジは叫んで走り出す。

「うっおおおおおおおおおおおおおっ！」「ドドドドドドドドド」

パニックという文字が脳裏をよぎり、鏑助は最悪の事態を想定する。

ツドドドドドドド「うおおおおおおおおおおおおお
おおおっ！」

100メートル程の距離を全力疾走で往復してきたケンジが靖助に
向かって吼えた。

「さびすけー！」

「お、おう……」

「デスゲームだとよっ！」

「おう……」

「ほんとか！？」

「正直わからん。だが、今は信じた方が良い」

「だよな！」

「おう」

「よっし！狩りに行くぞ！」

「は？ケンジ……お前何言っ「うつさい！行くぞ！」！？」

「うおりゃあああああああ！いっくぞおおお！」

「オウイエアアアッ！」

玉男が躊躇無く付いて行った……

靖助はケンジの正気を見極めるつもりでいたのだが、その心配はな
さそうだった。最近鳴りを潜めていたが、出会った頃のケンジはま
さにこんな感じの無謀な突貫キャラだったのだ。その頃を思い出し
て、新たな心配事に頭を抱えなくなる靖助であった。

「デスゲームだっていうのに、突貫キャラ復活ってどうなんだケン
ジ…… お前あの頃一日に何回死んでたんだよ…… と、とにかく

二人を追わなきゃ！風音！ミナモ！」

「はいな！行こうや！さびやん！」

「うん！行こうっ！」

町を出たところで、先行していた二人に追いつき、両脇に畑が続く道を駆け抜ける。ゲーム内アナウンスがやっと途切れた頃、畑を抜けて広い草原に出た。その先は木々が生い茂り深い森になっているようだ。前作の経験から、いきなり森に入るのがいかに無謀か分かっている、この草原を狩り場と定める。ざっと見回してみても、他のプレイヤーキャラは見当たらなかった。

「おりゃあああ！」

目の前にいた羊にケンジが襲いかかる。スキルが低いうちは動物を狩るのがこのゲームの基本なので、5人で羊をタコ殴りにする。スキル0からだと言相手でも手間取るが、戦闘中にどんどんスキルが上がっていき、やがて羊は絶命した。

「嫌やあー！グロい！グロすぎるわあー！」

風音の叫びはみんなの気持ちを見事に代弁していたようで、全員ウンウンうなずいている。最新のVRMMOだけあってグラフィックはリアルと区別が付かなくなっている。CG臭さの残っていた前作をプレイしていた面々には、それだけでショックなのだが、何よりも問題なのは、相手の挙動、肉をえぐる手応え、流れ出る血液、必死の反撃、相手の攻撃が当たった時のこちらの痛み、死ぬ間際に見せる悲哀に満ちた表情、その全てがリアルすぎることなのだ。前作はもう少し挙動も画一的で、ゲームらしさが残っていたのだが……

技術の進歩なのか制作者の悪意なのか、おそらく両方だろうという結論に達して、考えても仕方ないと次の獲物に向かう。

羊を50匹ほど狩るとスキルの上がりが悪くなってきた。ドロップアイテムの回収がリアルな剥ぎ取りじゃ無い事がせめてもの救いだ

が、風音はそろそろ限界に近づいていた。

「うちもつ前衛やめる…… こんなん耐えられへん……」

「風音ちゃん！ふぁいとっ！」

魔法使いのミナモは、しれつと応援する。間違っても自分と前後衛コンバートなんて事態が起こらないように。

「ここを耐えて、魔物を狩れるようになれば、羊さんの悲しい瞳ともおさらばよ！」

「そ、そうやな！この悲しみを、憎らしげな魔物どもにぶつけてやればええねんな！」

「そうそう、その調子よ！風音ちゃん！」

「そうと決まればどんどんいつたるで！次の相手はどこや！」

「そろそろ町に帰ろう」

「なっ！何を言い出すねんさびやん！今の話を聞いてなかったんかい！うちのたぎる血潮をどないしてくれんねん！」

「いや、鏑助のいうとおり、いったん戻ろう」

「んなっ！ここまで先頭切つて突っ込んできたケンジまで！」

「我が輩もいったん戻るに賛成じゃの」

「くっ！中年太りのおっさんまでもか！」

「じゃー私も帰るに一票？」

「ミッナもっのううううぎっりもっのっ！」

町へ戻る途中で何組かのパーティとすれ違っ、そろそろ頭の整理のついたプレイヤー達が出てきたのだろう。今となっては全員がケンジの行動に救われたと気付いていた。すれ違うパーティが例外なくこちらに怯えた視線を向けてくるのだ。デスゲームならばおそらくPKも許されているはずで、今自分たちがその気になれば、どちらが勝つかは目に見えている。今から初めて狩りに向かうパーティが

狩り場から帰ってくるパーティを警戒するのは当然の成り行きだった。

町に着いた一行は、いまだ広場にへたり込んで動けないプレイヤー達を眺めながら、冒険者ギルドへと向かう。初級の装備やアイテムなら全てそこで揃うはずだし、クエストを受けることも出来る。冒険者ギルドは何処の町でも目立つ場所に有るので、迷うことはなかった。扉を開けると以外と賑わっており、「みんな結構タフだよなー」などと話し合いながら、張り出された依頼を眺める。壁の中央にあるのはPCから出された依頼を張り出す掲示板で、生産者から戦士向けに素材調達依頼などが張られているはずなのだが、報酬を払える者が居ない今、一枚の依頼も張られていない。鏑助はその奥のNPCからの依頼が張られてある掲示板で目当ての依頼を見つけ、はがして受け付けカウンターへと向かった。

トラウマものの狂ったようなNPC達の笑いを思い出して、おっかなびっくり話しかけるものの、先ほどのことなど無かったかのようにな、にこやかな笑いを向けられて、拍子抜けしつつも依頼を受ける。『羊毛の調達』『ラム肉の調達』の二つだ。NPCに店売りするより多少儲かるし、クエストポイントも手に入る。クエストポイントが貯まればクエストランクをアップ出来て、難易度の高い依頼を受けられるようになる。その場で素材を渡してクエスト終了。ギルドを通した依頼は、PC、NPCの依頼にかかわらず、ギルドとのやり取りだけでクエストが完了出来るようになっていて。少しギルド内がざわついたが、今は気にしない。クエストアイテムになっていないマトン肉等を店売りする。

稼いだゴールドで『初心者向け治療キット』と『初級薬剤』を買う。先ほどの戦闘では、一戦ごとに座って休憩をとって自然回復に任せていたのだが、今後のことを考えると回復手段は何よりも優先して

確保する必要がある。治療キットの戦闘中の回復量は微々たるものだが、例えば治療スキルが上がり、回復量も増えていくし、戦闘中でなければ他人の治療も出来るようになる。戦士職にとっては一般的な回復手段なので、ケンジと風音の分を買って、消耗品の薬剤をある程度の量買っておく。

次に回復魔法の初歩『セルフヒール』の魔法書と、魔法触媒の『光の粉末』を買う。これは光の魔法使いである、ミナモと鏑助の分だ。初歩だけあって自分しか回復できないが、上位の回復魔法の回復量はゲーム中でダントツなので、なるべく早く回復魔法スキルを上げるのは、パーティの最優先事項と言っている。買ったその場で魔法書を読み込み、魔法を覚える。光の粉末は、初期の光の魔法共通の触媒なので多めに買っておく。

最後は闇の魔法使い玉男のために、暗黒魔法の初歩『セルフドレイン』の魔法書と『闇の粉末』を買う。相手のHPを奪って自分のHPを回復するドレイン魔法のセルフ版という、訳の分からない位置づけの魔法だが、全く効果が無いというわけではなく、血流を活性化させることで自然回復時の回復力を高めるといって、非常に微妙な効果を誇る……。ぶっちゃけたただの練習用に近い魔法である。しかし、前作では暗黒魔法のスキルを上げることがヴァンパイアへの第一歩だったので、張り切った玉男は光の速さで魔法書を読み込んだ。

全員の回復手段を揃え、他に買うべき物を話し合う。
真っ先にケンジが口を開いた。

「まずは盾が欲しいな」

「せやなー、盾は必要やなー」

「そうだな、買っちゃおう」

風音が続いて、財布役の錆助が答えた。

『ウツドバックラー』を二つ買う。各スキルの初期装備は安く買えるようになっていたため、迷う必要はない。

キャラメイク時に武器か、魔法書と触媒か、生産道具を一つ貰えるため、ケンジは『刀剣』スキルの初期装備である『ナイフ』を、風音は『斧』スキルの初期装備『鉈』を、始めから持っていた。これで『いずれかの武器スキル』『盾』『治療』と、一般的な戦士が上げるべきスキルはすべて上がることになる。

そろそろ武器も新調したい二人だが、そこまでの余裕はまだ無いだろうと思い、黙っていた。今はスキルを上げることを優先すべきである。

次に財布役の錆助が、自分の欲しい物を言う。

「俺は、付与魔法上げたいな。『ホーリーブレイド』買っていていい？」

反対する者はなく、錆助は魔法書を買って読み込んだ。

キャラメイク時に貰えるのは攻撃魔法に限られるため、光の魔法師である錆助とミナモが覚えたのは、破壊魔法の初歩『ファイアボール』だけだった。付与魔法の初歩『ホーリーブレイド』を覚えたことで、錆助はエンチャンターへの道を一歩踏み出した。

次にミナモが言う。

「召還魔法を覚えたいところだけど、お金かかるし後回しねっ！まずはやっぱ魔法補助具かな？錆助ー、魔法スティックお願いっ！」「ああ！それは俺も欲しいな！そこまで頭が回らなかった、買っちゃおう！」

「ふふーんっ！やっぱりにわか魔法使いは駄目ねっ！」

「ほっとけ！」

『魔法補助具』スキルの初期装備『魔法スティック』を二つ買う。簡単に言えば魔力増幅アイテムだ。魔力を込めて直接攻撃も出来るが、さほどの威力は見込めず、あくまで緊急手段だ。『いずれかの魔法スキル』『魔法補助具』『回復魔法』、一般的な魔法使いが最初に上げるべきスキルである。

やつと自分の番かと、玉男が口を開く。

「我が輩は召還魔法と牙スキルを上げたいのである！」

「ちよつと玉つち！？召還魔法はお金がかかるからって、私が諦めたところでしょつ！」

「ヴァンパイアを目指す身として、ミナモよりも切実なのじゃ！」

「切実なところ悪いけど、さすがにもう金がないな。牙だけで我慢してもらおうか。」

パーティの財布役は容赦ない。

「ぐぬぬぬつ！なんたる屈辱！僕も召還できずして何がヴァンパイアか！」

「玉男はまだ全然ヴァンパイアじゃないだろーが！十年早いわ！」

ヴァンパイアとは、決められたいくつかのスキルを一定の数値まで育てることで貰える称号の一つで、称号が付くと何かしらのパッシブスキルが発動し、常時そのスキルの恩恵を受けられるのだ。玉男がこだわるのも無理はないことだ、しかし……

召還魔法は光、闇の魔法使い関係なく使える魔法だが、触媒が特殊で他の魔法よりもお金がかかるのだ。後回しにされるのは仕方がないことなのである。

闇の魔法使いたる玉男が最初に覚えたのは、『崩壊魔法』の初歩『ロッテンウィンド』だった。『牙』スキルの初歩『噛みつき』の技書を買ってもらい、もちろん光の速さで覚えた。『暗黒魔法』もさ

きほど覚えた玉男が望むスキルは、残すところ『召還魔法』だけなのだが、その道のりは遠く険しい……

乳苦

買い物が終わり、『野犬討伐』の依頼を受けてギルドを後にしようとした一行に、声を掛けてきたプレイヤーがいた。

「なあ、あんたらはもう、一狩りしてきたみたいだが、どんな感じだった？」

先ほどの依頼完了を見ていたプレイヤーの一人だろう。いきなりこんな事態になって、やはり不安なのだ。

気持ちは十分に分かるので、「行けば分かる」なんて事は錆助は言わない。

「まあ、行ってみればわかるけどなあ。めっちゃ最悪やでーあれば、ほんまトラウマもんやって、あんたも覚悟しときや！」

だが、風音は言うのである。

相手の顔がみるうちに青ざめていくのを、気の毒そうに眺めながら錆助達は扉を開けた。

通りに出ると、ギルドの隣が酒場になっていて、多くのプレイヤーが集まっているのが見えた。酒場で即席パーティを募って狩りへ向かおうとしているのだろう。この状況で見知らぬ人間とパーティを組むのはかなり不安だろうが、いつまでも座り込んだままで自分だけ取り残されるよりはマシだと思ったのだろう。ヤケになっているだけの可能性も否定できないが……

そう考えると、気心の知れた仲間が集まっている自分たちは、本当に恵まれているのだと思うことが出来た。

「風音ちゃんってば鬼畜よねっ！せつかく覚悟を決めて初めての狩りに出かけようとしている人を、顔面蒼白になるまで脅しつけるなんてっ！」

「な、何をいうてんねん！うちはただ聞かれるままにホントのことを教えてやつただけやんか！」

「果たして、そこでホントのことを言っちゃうことが、優しさって言えるのかしら？あの一言さえなければ、あの人はきっと狩りに向かっていて、心も体も成長出来たかもしれないのに、かわいそうに風音ちゃんの心ない一言のせいで、今頃は膝を抱えて縮こまり、ガタガタと震えながら涙しているに違いないわっ！鬼畜よねーっ！」

「ちよつとミナモ！あんたいい加減にしときや！黙って聞いてれば好き勝手ぬかしおって！誰が鬼畜やねん誰が！」

「チ・チ・ク？それはお乳のチチに苦しむのクで乳苦ってことかしらっ？」

「乳苦やなくて鬼畜やー！ほんまいい加減にしいや！」

「あらあら…… 風音ちゃんってば、自分のことを鬼畜呼ばわりだなんて、いったいあなたに何があつたのかしら？私で良ければ力になるわよ？」

「全部あんたのせいや！ミナモのあほー！」

恵まれているのだと思いたかった……

広場には相変わらずずくまった人々が大勢居た。ギルドと酒場を見てきて、事態は好転しているように思い始めていた鏑助は、自分の間違いに気付く。

「まだ動けない人達の方が多いんだよな……」

「ああ、だけど俺たちがしてやれることなんて、何にもねえだろ？」

ケンジの言うことが正論だと錆助も思う

「だけど……いきなりデスゲームだなんて言われて、町の外に出れば死んでしまうかもしれないんだ。動けないのは当たり前だけど、それじゃいけない事を俺たちはもう知ってる。違うか？」

「いや、違わねえな。で、お前は一体どうするってんだ？」

「それが解らないから困ってるんだ」

「解らねえならどうしようもねーじゃねえか。解らねえ奴が無責任に動いていいような事態じゃねえし、解るまで待つか、解った誰かが動いてくれるのを待つしかねーんじゃねえのか？今は」

「ッ！？」

ハアアアアアーツ……錆助は、胸の中のモヤモヤをすべて吐き出すかのように、肺から酸素を絞り出した。

「あーっ！そうだな、その通りだケンジッ！そもそも俺なんかが悩んでどうするんだ？って話だし、どー考えても俺の手に余る事態だ。それでも、まかり間違って、もし何か良い案でも思い付けたなら、その時ちゃんと考えればいいだけの話だ。だけど、お前ってそんなキャラだったか？もっとこう、解らねえなら突き進めー！みたいな言葉は悪いけど、当たって砕ける精神満載な突貫キャラって感じだったじゃないか」

「当たり前だろーが！デスゲームだってんなら今までみたいに出来るわけねえだろーが！ここから先はゲームじゃねえーってんなら、俺は正直、ウダウダと停滞してる連中のことなんてどーでも良いと思うてる。俺は俺の仲間だけを守るために全力を尽くすし、その為なら何だっけとしてみせる。お前みたいに連中の心配なんぞ出来ねえーし、しようとも思わねえ。お前はどーなんだ？どーしたい？お前が守りたいものはいったいなんなんだ？なあ！錆助！」

「……………ケンジくん」

「ハッ？どうした？錆助」

「だから……ケン・ン・ジ・く・ん！」

「だから！なんだってんだ！？錆助！」

「ケンジくんってば格好いい、惚れてしまっ ぽっ あたい、ケンジくんのこと、守りたい」

「気色悪いこと言ってるんじゃないやねえー錆助！人が真剣に話してるのに茶化しやがって！なんなんだ ぽっ って！擬音をわざわざ口に出してんじゃねー！」

「きらーんっ」

少し前を歩いていたミナモトが、擬音をわざわざ口に出しながら満面の笑みを浮かべて振り向いた。

「がんばれっ！男の子っ！……………お布団敷く？」

「敷かねーよ！」

いつの間にか最後尾を歩いていたケンジは、プンスカ怒りながら足早に先頭へ移動した。

茶化す形になってしまったが、錆助はケンジの言葉が本当にうれしかったのだ。隣で喜色満面の笑みを浮かべているミナモトも同じ気持ちだろう。先頭では一人になったそうなケンジに風音がずっと絡んでいる。

「ふふふっ」

隣から聞こえてきた笑い声に、錆助は思った。

『よっぽど嬉しかったんだなー、こいつは』

「グヘヘヘッ」

隣から聞こえてきた笑い声に、鏑助は思った。

『違う！こいつは何かしら良からぬ妄想をしている！危険だ！この女、早く何とかしないと、妄想の中の黄門様が大ピンチ！』

その時玉男が喋り出した。

『よしっ！ナイスだ玉男！お前の力で妄想の闇を吹き払い、黄門様をお救いするのだ！』

「どうやら、我が輩が知らぬ間に、百合と薔薇でカップリングが出来上がっておったようじゃのう。人の嗜好をとにかく言うつもりは無いが、正直少し羨ましくはある。我が輩も早く、ちみつ娘とキヤツキヤウフフの大冒険を繰り広げたいものじゃのう」

「……誰が百合（薔薇）だー！……」

言葉だけでは修まらなかったようで、ケンジと風音はすでに獲物を抜いていた、鏑助とミナモトは詠唱を開始している。

「……死ねー！このっロリコンがー！……」

ザクッ、ズシャッ、ドッカーンッ、バリバリーッ！

「ふっつ、危ないところだったわねっ」

ミナモのつぶやきが、錆助の耳にかすかに届いた。

『危ないところだったのー？』

錆助は、咄嗟に黄門様をお守りした。

「ガッハアー！酷いではないか、おぬし達！ぬ？なんじゃ？その色は？」

玉男以外の四人はお互いを見回して、すぐにその言葉を理解した。先程までとは一転、四人は深刻な表情を浮かべている。

「お、戻ったのう。なんだったのじゃ？」

「恐らく、犯罪者の印だったんだろうな」

錆助が話し出すと、全員が耳を傾けた。

「サスティンオンラインでは対人戦が出来るのは戦争エリアだけだったから、こんな機能は無かったけど、他のゲームでは犯罪を犯したキャラは名前が灰色に、他人を殺したキャラは名前が赤くなるって機能があったんだ。おそらくそういうことだろうな」

「おぬし達、犯罪を犯したのか？」

「そんな血まみれの黒こげで何いってんねん！たまやん！」

「ぬお？言われてみれば、やたらと痛いぞー！？」

「言われるまで気づかんかったんかい！」

「悪かったな玉男。いままでは他のキャラに攻撃なんて出来なかったから、ただの突っ込みで済んでたけど、今は攻撃出来るから、ダメージが通って犯罪者フラグが立っただろう。でも戦闘中の誤爆もあり得るからな、パーティメンバーだったからか、あれがデフォルトの時間だったのかはわからないけど、すぐに元に戻ったんだろうな」

「ふーむ、なるほどのう、それでそんな顔をしておるのか？なに、我が輩は気にせんから、おぬし達も気にする必要はないぞ！ハッハッハッハッ！」

「違っんだ玉男。想像はしていたことだけど、今のでPK出来ることが確定しちゃったんだよ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3932z/>

サスティンワールド

2011年12月13日14時48分発行